群教セ	I01 － 01
	平23.243集

高等学校における
特別支援教育の推進にかかわる実践的研究
――「支援ステップ表」の作成と
表を活用した特別支援学校コーディネーターの活動――

長期研修員　　橋本　美佳

《研究の概要》

本研究は、高等学校における特別支援教育の推進を目指して、特別支援学校のコーディネーターが高等学校のコーディネーターへ行う支援の在り方について探るものである。高等学校コーディネーターが校内のファシリテーターとして機能し、高等学校が組織的に特別支援教育を進めていけるようにすることを踏まえ、特別支援学校のコーディネーターの活動についてまとめた「支援ステップ表」を作成・活用した実践を通して、高等学校への支援の内容・方法について検証する。

キーワード　【特別支援教育コーディネーター　特別支援学校　高等学校　支援】

Ⅰ　主題設定の理由

平成19年の学校教育法の一部改正により、すべての学校において特別支援教育が取り組まれ、特別支援学校は地域の特別支援教育のセンターとして各学校へ支援を行ってきた。

しかし、平成21年に文部科学省より公表された高等学校ワーキンググループによる報告によれば、高等学校における特別支援教育は、小・中学校に比べ校内支援体制の整備に遅れがあり、体制整備が進んでいても実際に機能していない場合があるという現状が示された。本県では、「特別支援教育推進方針」の今後５カ年（平成20～24年）の重点目標として、高等学校における特別支援教育体制の整備と発達障害などを含む障害のある生徒に対する進路指導の充実が挙げられ、特別支援学校のもつ知識・ノウハウ等の提供を行い、高等学校を支援していくことが求められている。東京学芸大学特別支援科学講座「『発達障害と不適応』問題の研究動向と課題」（横谷・田部・石川・髙橋：2009）では、発達障害と不登校などの学校不適応の関連性について述べられており、高等学校入学者の約２．２％が発達障害など困難さを抱える中、これらの生徒の適切な指導と必要な支援を行うことは喫緊の課題であると言える。

上記のような課題を解決するために、特別支援学校は高等学校のニーズを把握し、センター的機能としてどのような支援を提供できるかを検討していく必要がある。そして、特別支援教育コーディネーター（以下特別支援学校コーディネーター）が、その専門性を生かしながら、高等学校の特別支援教育コーディネーター（以下高等学校コーディネーター）と連携し、高等学校における特別支援教育を推進していくことが有効であると考えた。具体的な方策として、高等学校コーディネーターへの支援の進め方を段階的に表し、特別支援教育を学校全体で進めていけるようマネジメントをする視点に立った、「支援ステップ表」を作成し、それを踏まえて支援を進めていくことを考えた。特別支援学校コーディネーターは、対話を通して高等学校コーディネーターの気付きを引き出し、学校全体の思いや願いに沿った取組や校内の組織について自ら気付き、考え、実践に取り組んでいけるような支援を行う。高等学校コーディネーターが校内のファシリテーターとして機能し、組織的に特別支援教育を進めていけるよう支援していくことが、高等学校における特別支援教育の推進につながると考え、本主題を設定した。

Ⅱ　研究のねらい

高等学校における特別支援教育の推進を図るために、特別支援学校コーディネーターが行う高等学校コーディネーターへの支援をまとめた「支援ステップ表」の作成と活用を通して、高等学校への支援の内容や方法の有効性を明らかにする。

Ⅲ　研究の見通し

1　研究の構想

研究の構想は図１の通りである。

特別支援学校コーディネーターが「支援ステップ表」を支援の指標としながら高等学校コーディネーターを支援する。校長や教頭、教職員の思いや願いを聞き取り、高等学校コーディネーターと対話をしながら、学校の状況を整理し、気付きを引き出していく。高等学校コーディネーターが校内の協力者や関係する分掌の人とかかわりながら、組織的に取り組めるようマネジメントすることで、特別支援教育が推進していくことを目指す。

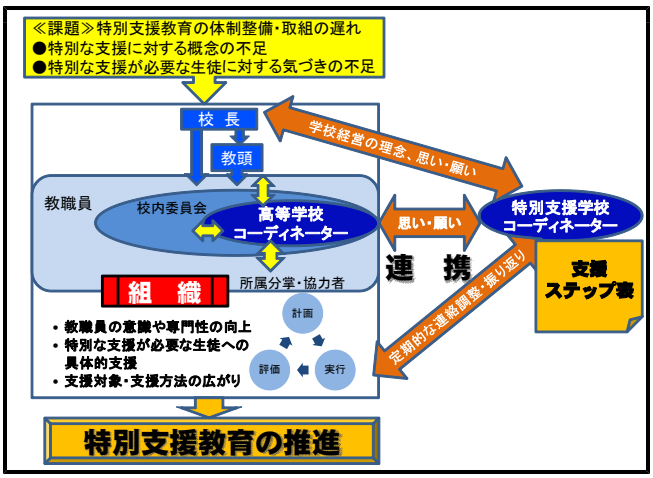


図１　研究構想図

2　研究の流れ

(1)　本県の特別支援学校コーディネーターと高等学校コーディネーターへ聞き取りを行う。高等学校における特別支援教育への取組の現状と課題、特別支援学校に求められていることや高等学校が組織的に取り組むための有効な支援の内容や方法を探る。

(2)　(1) の結果及び特別支援学校コーディネーターの活動理念を踏まえて、「支援ステップ表」を作成する。「支援ステップ表」を基に協力校の高等学校へ支援を行う。

(3)　高等学校における発達障害などの支援の必要な生徒に対する、高等学校コーディネーター及び教職員の意識や支援力が高まったかどうかを見取り、高等学校への支援の有効性について検証する。

3　研究計画

(1)　研究推進計画

月	内　　容
5	・研究の構想　・文献研究　・研究テーマの立案　・研究計画の立案　・聞き取り内容の検討
6	・県内高等学校及び特別支援学校コーディネーターへ聞き取り実施（～７月）
7	・研究テーマの設定　・研究計画の修正　・聞き取りの回答の分析　・支援ステップ表の作成
8	・協力校コーディネーターとの情報交換
９～11	・実践１　Ａ高等学校（訪問相談４回）　・実践２　Ｂ高等学校（訪問相談８回） ・支援内容や方法の評価
12	・実践のまとめ
1～2	・研究のまとめ

(2)　聞き取り計画

実施時期	平成23年６月～平成23年７月	
対　象	県教育委員会特別支援教育室指導主事　１名 県内特別支援学校コーディネーター　４名	県内高等学校特別支援教育コーディネーター　６名
内　容	・高等学校への支援の現状、支援内容 ・支援の成功例と失敗例、その要因 ・高等学校が組織的に取り組めるようになるための支援のポイント ・高等学校コーディネーターが校内で機能するために必要な資質	・自校での特別支援教育の目指す姿 ・現在の取組と推進の手順、今後の見通し ・取組の有効性、コーディネーターの努力、課題や問題点、解決方法 ・特別支援学校のセンター的機能の利用状況と有効であった支援

(3)　検証計画

検証方法	相談中の観察と支援記録シートの記述（発言内容、表情、声の調子）
検証内容	・「支援ステップ表」を活用した特別支援学校コーディネーターの支援は、高等学校コーディネーターの意識や専門性、支援力の向上に有効であったか。 ・「支援ステップ表」を活用した特別支援学校コーディネーターの支援は、特別支援教育の取組の推進や教職員の意識や専門性、支援力の向上に有効であったか。

Ⅳ　研究の内容

１　特別支援学校コーディネーターの活動理念

(1)　高等学校コーディネーターの気付きを引き出す支援

特別支援学校コーディネーターは、特別な支援が必要な生徒の指導や校内支援体制の推進について、高等学校コーディネーターが自ら気付き、考え、行動を決定できるような支援をしていく。高等学校コーディネーターの思いや願いに対し受容的な態度で接し、傾聴や承認をしながら信頼関係を築いていく。指示ではなく質問をし、想像力を喚起させ、思考を深められるようにする。疑問点について丁寧な説明と情報提供を行い、選択の材料を増やしていく。対話を積み重ねる中で答えを引き出し、自発的行動を促す。自ら出した答えは、自己責任の意識が生まれ、自分らしく活動している充実感、自分の力で課題が達成できた成就感を味わうことができる。選択や行動に対する承認や賞賛を行い、モチベーションが高まるような支援を行う。

(2)　マネジメントの視点に立った支援

特別支援教育という新しい教育活動が学校全体に浸透し、その機能を十分に発揮するために、高等学校が組織的に特別支援教育を進めていけるよう、マネジメントの視点に立った支援を行う。校長や教頭のリーダーシップの下、高等学校コーディネーターが関係する分掌や校内委員会のメンバーなどと連携することの有効性や必要性などに気付き、校内のファシリテーターとして機能するよう支援する。教職員が組織内のそれぞれの立場で連携し、意欲と責任感をもって取り組むことで、高等学校が自治的に取り組めるようになると考える。取組の計画を立てる段階で、評価までの構想が立てられるようにし、定期的にやりとりをしながら、取組が継続、向上していくよう支援する。

２　聞き取りの結果と考察

(1)　特別支援学校コーディネーターへの聞き取りから（詳細は資料１－①）

高等学校における特別支援教育の取組について、全員が遅れや格差があると感じている中、教職員の考えを承認・賞賛する、高等学校の気付きや自立を促す、実際の事例や具体的な支援方法を挙げることが支援の成功につながるということが分かった。高等学校側の成功要因から、支援の必要な生徒の存在に自ら気付き、その必要性を実感することができれば、取組が進んでいくと考えた。組織や複数で取り組むことも成功要因として挙げられ、そのためには、学校の実態に合った支援を行う、頼られすぎない関係を作るなど、特別支援学校コーディネーターが黒子となって高等学校コーディネーターを支えていくことが支援のポイントとなると考えた。

(2)　高等学校コーディネーターへの聞き取りから（詳細は資料１－②）

特別支援教育を進めていく上での難しさとして、教職員や保護者の理解の不足が多く挙げられる中、高等学校コーディネーターに必要な資質は、発信力、人間関係調整力、行動力、情熱・やる気などであった。周囲の理解を得るために、高等学校コーディネーターが関係する人とかかわっていけるような支援、情熱ややる気をもてるようなかかわりをしていくことが必要であると言える。推進の手順は、校内研修などを行い、発達障害についての基礎的な知識や専門性を身に付けることで特別な支援が必要な生徒の存在に気付き、実態把握やケース会議を実施して、具体的な支援が進んでいくことが分かった。今後取り組みたいこととして、進路支援や卒後支援、全体を対象とした支援などが挙げられており、支援の幅は、現在から将来、個人から全体へ拡がっていくと考えられる。

３　「支援ステップ表」の作成と活用

(1)　支援ステップ表の作成

高等学校での特別支援教育の推進に向け、１で述べた活動理念と２で述べた聞き取りの結果を基に、「支援ステップ表」（表１）を作成する。ステップ０では支援のベースとなる高等学校コーディネーターとの信頼関係を築き、特別支援教育で目指す姿や生徒がどんな姿になってほしいかなどの考えや夢を引き出し、モチベーションを高めていく。ステップ１では、校長や教頭、教職員の思

いや願いと学校の状況を集約しながら学校全体の夢を引き出し、実現のための具体的な取組を決定できるように支援していく。ステップ２では、校内の人材や強みを知り、組織で取り組む構想を立てる。ステップ３ではその取組を計画→実行→評価というサイクルで実施できるよう支援し、次の課題に気付けるようにしていく。（〰は省略を表す。詳細は資料２）

表１　支援ステップ表（特別支援学校コーディネーターの活動表）

※表中①②などの番号は、実践の経過におけるコーディネーターの支援と対応する。

ステップ０		信頼関係を築き、高等学校コーディネーターのモチベーションを高め、特別支援教育の推進に向けた考えや夢を引き出す ○校風や教育課程など、ＨＰなどで学校の基本情報を収集しておく。…① ○高等学校コーディネーターと面談し、現在の課題や要請の理由を聞き取る。受容的な態度で接し、話しやすい雰囲気を作る。　…②		
ステップ１		状況を集約して、学校全体の思いや願いに添った、特別支援教育の目標や具体的な取組が描けるようにする ○校長や教頭との面談などから学校経営の構想を取材し、校長や教頭の意向や特別支援教育に対する思いや願いを分かりやすい言葉で高等学校コーディネーターに伝え、現状が把握できるようにする。校長や教頭には、高等学校コーディネーターの思いや願い、夢を報告する。…①		
ステップ２		校長や教頭と相談しながら、組織として取り組むための構想が描けるようにする ○高等学校コーディネーターが校内で話したり相談したりしやすい人、頼りに思っている人、共通の思いや願いをもっている人は誰かを聞き、協力者の存在に気付けるようにする。その人のどんなところがよいか、どんなところで助けてもらっているかを聞き、一人で取り組むよりも複数で取り組むことの大切さに気付けるようにする。　…①		
		(1)教職員の意識や専門性の向上 ～校内研修の実施～	(2)特別な支援が必要な生徒への 具体的支援～校内委員会の開催～	(3)支援対象・方法の拡がり ～進路支援、保護者支援など～
ステップ３	計画	校内研修までの準備や実施後の活動について構想が描けるようにする ○教職員の思いや願いを収集する効果的な方法を一緒に考える。…① ○研修の目的や考えられる成果に	校内委員会開催までの準備や、どんなことを話し合えばよいのか構想が描けるようにする ○生徒の実態把握、担任や本人、保護者の思いや願いを収集するにあたって、効果的な方法を一緒に考える。…①	校長・教頭などと案を作り、学校全体として取り組むための構想が描けるようにする ○校風の似た学校や同じ取組をしている学校について情報提供し、高等学校コーディネーターが校内の人と相談したり、取組をしている
	実行	○協力要請があった場合は、高等学校コーディネーターをサポートしながら、教職員との対話を心がけ、思いや願い、考えを引き出し、承認する。２回目以降は高等学校コーディネーターが中心となって行えるよう、一緒の場で活動するようにする。…①		
	評価	高等学校コーディネーターのさらなる思いや願いを引き出し、次の夢が描けるようにする ○成功した点について、その成果を聞き取り、事前に考えたり、留意したりしたことのよいところを賞賛する。…① ○教職員の反応を聞き取りながら、	○支援を行ってみての教職員の気付きや生徒の変容について高等学校コーディネーターから聞き取り、成功した点は賞賛するとともに、次の課題を引き出す。	○支援を行ってみての関係者の気付きや生徒や保護者の変容について高等学校コーディネーターから聞き取り、成功した点や成果について賞賛する。…①

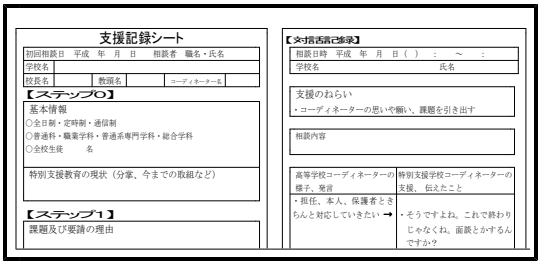
(2)　「支援ステップ表」の活用

ステップ０から支援を始め、学校の状況や高等学校コーディネーターの意識の変化を読み取りながら、順番に支援を進める。ステップ３の評価では、次の課題を引き出し、再び計画に結びつけ、取組に対する定着と、維持や向上を図る。新たな取組の必要性が出てきた場合は、同様にステップ１から支援を進め、ステップ３のサイクルへつなげていく。特別支援学校コーディネーターの支援を徐々に減らしていき、高等学校コーディネーターの自立を促す。

(3)　支援記録シートについて（詳細は資料３）

高等学校訪問の際、コーディネーターの発言ややりとりの内容、様子や表情の変化などを記入していく。訪問後、さらに気付いた点や補足を書き込みながら、支援が有効であったか振り返ると

もに、高等学校コーディネーターや教職員の意識の変化を読み取る資料にする。「支援ステップ表」と対応させながら支援の進捗状況も読み取り、次回の支援のねらいを立てていくための手がかりとして活用する。


支援記録シート

初回相談日　平成　年　月　日	相談者　職名・氏名		
学校名			
校長名	教頭名		コーディネーター名

【ステップ0】

基本情報
○全日制・定時制・通信制
○普通科・職業学科・普通系専門学科・総合学科
○全校生徒　　名

特別支援教育の現状（分掌、今までの取組など）

【ステップ1】

課題及び要請の理由

【◇指示者記録】

相談日時　平成　年　月　日（　）　：　～　：	
学校名	氏名

支援のねらい
・コーディネーターの思いや願い、課題を引き出す

相談内容

高等学校コーディネーターの様子、発言	特別支援学校コーディネーターの支援、伝えたこと
・担任、本人、保護者ときちんと対応していきたい →	・そうですよね。これで終わりじゃなくね。面談とかするんですか？

図３　支援記録シート（一部）

Ⅴ　実践の結果と考察

1　実践１　コーディネーター１年目、全日制普通科A高等学校への支援（実践期間2ヵ月、計４回）

(1)　基本情報の収集（ステップ０－①）

①　コーディネーターの経歴

教職経験６年目。初任校の知的障害特別支援学校で５年勤務し、今年度Ａ高等学校へ赴任した。高等学校の経験も特別支援教育コーディネーターの経験も１年目である。

②　学校の現状

発達障害の診断名のある生徒は在籍しておらず、生徒の様子も落ち着いている学校である。保健部教育相談係内に特別支援教育コーディネーターを置いている。５月に校内委員会が開かれ、次回は支援の必要な生徒が出た場合に開催することが決まった。

(2)　支援の方針

特別支援学校コーディネーターがよき相談役となり、高等学校コーディネーターの思いを受容的に受け止め、話しやすい環境と安心できる関係を築いていく。疑問点については情報を提供し、高等学校コーディネーターの知識を増やしていく。考えを引き出し、承認しながらモチベーションを高める。学校の状況を集約し、整理していくことで、Ａ高等学校での特別支援教育は何をすればよいのか、校内の誰と相談していけばよいのかに気付き、考え、具体的な構想が描けるようにする。

(3)　実践の経過

Ａ高等学校の実践について概要を表２に示す。

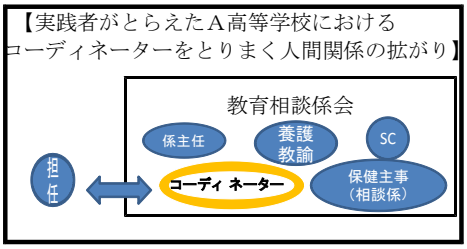
表２　A高等学校の実践の経過（一部）　　※◇は特別支援学校コーディネーターの見解を示す

月日	特別支援学校コーディネーターの支援、伝えたこと	高等学校コーディネーターの様子、発言
9/7	【ステップ０】 ・コーディネーターとして困っていることや知りたいことを聞き取り、気持ちに共感した。（ステップ０－支援②） ◇初めてのコーディネーターに不安を感じている様子だった。何をすればよいのか、考えるための材料が不足しており、気付いていることや考えはあるが、自信がないのではないかととらえた。 ・次回進学校の資料をもってくることを約束し、一緒に相談しながら考えていくことを伝えた。（ステップ０－③） ・特別支援学校と高等学校の違いやよい点などについて話を深め、コーディネーターの思いや願いを引き出し、承認した。発言を賞賛し、特別支援学校での経験が強みであることに気付けるようにした。（ステップ０－⑤⑥）	・コーディネーターとして何かしなくてはと思うが、何をすればよいのか分からない。 ・気がかりな生徒の情報交換からと考えたが、コーディネーターまで情報があがるシステムができていない。 ・進学校で問題も少ない高等学校がどう進め、取り組み、コーディネーターがどう動いているのか、先生方に賛同してもらいながら進めるにはどうすればよいのか知りたい。 ◇困ったような表情で、声も小さい。自分の考えを発言するが、語尾が「けど・・・」という終わり方が多い。 ・提出物を出せなかったり、友人関係で問題があったりする生徒の中に、特別な支援が必要そうな生徒もいるので何とかしたい。まだ自信をもって発言できない。
考察	・相談したり思いを伝えたりできる職員に気付けていなく、一人で考えている様子であった。学校の様子について聞き取り、対話をしながら校内の状況を整理し、教職員の思いにコーディネーターが気付けるようにしたい。	
9/28	【ステップ１】 ・特別支援教育推進事業モデル校や進学校の資料を提供し、説明した。（ステップ１－④） ◇解釈し考えを深める時間が必要と考え、具体的に話し合うのは次回にした。 ・生徒や職員の様子、気がかりな生徒がいた場合の職員の対応などを聞きながら、校内の状況を整理し、考えを深められるようにした。（ステップ１－②） ◇情報交換の場が取りづらい実情から、気がかりな生徒に気付いている教職員は多いが、情報が集まっていないだけなのではないかと考えた。コーディネーターが情報収集役になることに気付き、自分から教職員とかかわっていくことで、同じ考えをもつ人を見付けられると考えた。	◇真剣に資料に目を通し、解説に「そうなんですか」と何回も繰り返し頷き、興味をもって話を聞いたり資料を読んだりしていた。 ・行事や授業の指導に熱心な先生が多く、会議ではそれらを中心に話し合うことが多い。生活面の支援は、各担任で行っている。生徒の細かい点について情報交換をする時間や場が取りづらい。 ・進学校なので、進学率や平均点を伸ばすことを大切にしなければならない。 ・職員室では、課題が貼ってあっても提出できない生徒について話をしている先生もいる。

	いろいろな先生に聞いてみたら、どの教科でも出せていない子がいるかもね。	そうですね。先生たちの話に入っていっちゃえばいいんですよね。
	◇自分からかかわっていけばよいことに気付けたようであった。生徒の情報が集まる教職員は、高等学校コーディネーターの協力者になっていくのではないかと考え、情報が入る人は誰か、その人は特別支援教育についてどう考えているのか質問した。	◇表情がぱっと明るくなった。 情報は養護教諭に集まります。・・・どう思っているか聞いてみようかな。
考察	・教職員の思いや願いに目を向け、学校の状況を整理したことで、自分から担任の話に入ったり、養護教諭に聞いてみたりする意識をもつことができた。次回はコーディネータがつながっていけばよい人や協力者に気付けるようにしていく。 ・高等学校の取組について、初めて知ることも多かった様子であったため、さらに思考の材料を増やしていく時間が必要と考えた。ステップ１と２を同時進行し、具体的な取組と組織について気付き、全体の構想が描けるようにしていく。	
10/12	【ステップ１】 ◇コーディネーターの中で気付いたり考えたりしたことを引き出したいと考え、前回の資料を読んでどう考えたか質問した。 ・疑問を解消し、さらに考えを深め、具体的な取組が描けるよう、教育相談係内で活動しているコーディネーターの例や県内の進学校の事例を紹介し、資料を提供した。特別支援教育にかかわる取組一覧表（資料４）を提供し、チェックしてみることをすすめた。（ステップ１－④）	・教育相談の取組と関連させていけばよいのではと考え始めた。 ・教育相談と特別支援教育コーディネーターの関係性が分からないという疑問が出た。
	【ステップ２】 ・教職員とかかわりをもてたか確認し、自分から行動できたことを賞賛した。話したり相談したりしやすい人、頼りに思っている人、共通の思いや願いをもっている人は誰かを聞き、協力者の存在に気付けるようにした。（ステップ２－①） ◇表情や声から、自信が出てきたように感じた。教育相談係とのつながりも強くなってきて、分掌組織の中で動くことができると感じた。	・保健室には顔を出すようにして、生徒のこと聞いたり、話をしたりするようにしました。養護教諭は話しやすい。 ・学年の先生と話をするようにして、養護教諭や教育相談係長に、学年であったことを話すようにしています。 ◇表情が明るくなり、語尾もはっきりとしてきた。
	・教育相談と関連させながら、情報を収集・伝達・共有する方法を一緒に考え、高等学校コーディネーターが担任や学年主任の窓口となったり、情報発信役になったりすることに気付けるようにした。（ステップ２－⑥） ◇Ａ高等学校でコーディネーターの思いや願いを発信し、相談できる場所はこの会議と考えた。	養護教諭と話していく中で、SCが来校する日は情報交換をするようになった。そこが教育相談係会のようになっていると思う。
	その会議の中で、特別支援教育的な支援が必要な子に気付いたらどうする？	発言できます！ ◇明るい表情で、自信をもって発言できていた。
考察	・資料を基に思考を深め、教育相談との関係に気付くことができた。回答を急がず、情報と考える時間を提供することで、コーディネーターの選択肢を増やし、次回具体的な取組が描けると考える。 ・養護教諭や教育相談係長、学年の教職員と接点をもって情報交換するなど、自分で気付き、考え、実行に移せたことで、自信がもて、はっきりと発言できるようになってきた。高等学校コーディネーターをとりまく人間関係が拡がった。	
11/2	【ステップ１・２】 ・前回の資料の感想や、取組一覧表について話を進めながら、コーディネーターとして、Ａ高等学校でしていきたいことや取り組めそうなことを質問し、承認した。（ステップ１－③） ・キーマンとなる人、関係する人は誰か質問し、必要なメンバーに気付けるようにした。（ステップ２－③）	担任の先生の窓口になれるといいなと思います。 ・教育相談の先生とつながっていけばよいと分かった。 ・担任の不安を大切にして、担任や学年→コーディネーター→係のやりとりがさかんになればいいのかな。 ・コーディネーターにどんなことを相談したらよいか、どんなことをコーディネーターがしてくれるかを先生方に伝えられるとよいと思う。 ・資料や書籍の紹介や提供、校内研修を実施していく。
	◇具体的な取組やコーディネーターの役割が描けていた。校長や教頭、教育相談係と相談しながら、今後できるところから取り組んでいく姿勢が見られた。発展した考えをもっているように感じ、発言することで考えが明確になると考え、その他に自分自身の中でこれから取り組みたいことがあるかどうか質問をした。	◇ゆっくりであるが、一言一言しっかりと話していた。 気がかりな生徒への個別指導や、成績が下位の生徒への手厚い支援にも取り組んでみたい！
考察	・どんな取組をしていくのか、誰と相談しながら進めていくことがよいのか、コーディネーターの役割は何なのか、多くの考えを引き出すことができた。今後、教育相談係や養護教諭と一緒に、実施に向けた計画が立てられそうである。	

【実践のまとめと考察】

初回相談では、何をどう行い、誰に相談すればよいのか分からず、戸惑っていたコーディネーターであったが、受容的な態度で接し、考え方に共感し、連携していくことを伝える中で不安を軽減できた。安心感をもてたことで、２回目には課題が提出できない生徒について話している担任の会話に参加していくことや、生徒の情報が集まる養護教諭とかかわりをもとうとする意欲を引き出せた。自分から養護教諭や教育相談係、学年の教職員などにかかわれたことで、３回目には、学校の状況や組織に



（図４）

ついて整理し、校内の協力者を見付け、コーディネーターが発言できる場所が拡がった。（図４）思考を深めていく中で、最終回には、これから取り組みたいことが数多く挙げられた。今後、校長や教頭、養護教諭や教育相談係と相談しながら特別支援教育を進めていけるであろう。

２　実践２　コーディネーター３年目、全日制総合学科B高等学校への支援（実践期間2ヵ月、計８回）

(1)　基本情報の収集（ステップ０－①）

①　コーディネーターの経歴

教職経験19年目。初任校で高等学校に赴任し、５年間勤務。２校目で特別支援学校高等部を10年経験し、Ｂ高等学校へ赴任。Ｂ高等学校４年目、特別支援教育コーディネーター３年目である。

②　学校の現状

生徒指導部教育相談係内に特別支援教育コーディネーターが置かれ、支援が必要な対象生徒として５名が挙がっている。診断の有無にかかわらず、支援が必要と思われる生徒に気付いた担任がコーディネーターに相談し、特別支援学校などの外部機関の協力を得ながら、コーディネーターと担任が支援方法を考え、職員会議で学年主任から全職員に伝達するという流れができている。

(2)　支援の方針

コーディネーターの思いや願いを大切にしながら、校長や教頭、教職員の思いや願い、課題の背景にあるものに気付けるような質問をしていく。相手の立場に立ったアプローチをしていくことで、学校全体に特別支援教育の理解が進み、協力者が増えていくと考える。関係するキーマンや分掌に気付けるようにし、校内の状況を整理しながら、組織的な体制を作り、高等学校コーディネーターが連絡調整役として動けるようにする。具体的な取組に対して、計画→実行→評価のサイクルを実施し、取組の定着や維持、向上を目指していく。取組を繰り返す中で、支援の量を減らし、高等学校コーディネーターの自立を促すとともに、高等学校が自治的に取り組めるようにしていく。

(3)　実践の経過①

Ｂ高等学校での今までの取組を賞賛し、特別支援教育におけるさらなる思いや願いを聞き取ったところ、「みんなで支援していけるようになりたい」という答えを引き出すことができた。具体的な取組として、校内委員会とケース会議の開催が挙げられた。Ｂ高等学校においては、特別支援教育の学校全体の方針や年間計画を話し合う場を校内委員会、生徒の具体的な支援方法を考える場をケース会議ととらえ、支援を行っていくことになった。（ステップ１－②③）

Ｂ高等学校での校内委員会開催までの支援について、概要を表３に示す。

表３　校内委員会開催までの支援の経過（一部）

※高「　」は高等学校コーディネーターの発言、□内は特別支援学校コーディネーターの支援

◇は特別支援学校コーディネーターの見解を表す。

特別支援学校コーディネーターの支援と高等学校コーディネーターの発言・様子
◇課題の背景にあるものに目を向けられると新しい見方や考え方に気付くと思い、校内員会が今まで開かれなかった理由についてどう考えるか質問した。 高「実際の支援は進んでいるから、なんとなく開かないで来てしまったのかな…校長先生や教頭先生は他にも優先しなくちゃいけないものがあるから、必要度は低いのかもしれない」 ◇やや表情が曇り、自分の思いや願いの強さとの差にがっかりしているようであった。
【ステップ１－支援①】校長や教頭と面談し、Ｂ高校での特別支援教育の取組やコーディネーターに対して、どんなことを思っているか取材し、コーディネーターに伝えた。
〈校長〉コーディネーターとかかわっている担任は、支援の成果も出て恩恵を受けている。より多くの職員が活用し、支援の必要な生徒について話し合えると良い。 **〈教頭〉みんなで取り組み、機能する体制があるとよい。**校内委員会が開催できていないことは気になっている。学年主任とコーディネーターが連携し、開く雰囲気が広がっていくと良い。**トップダウンで行うよりも、先生方から挙がってくることを期待している。**
高「**校内委員会のこと考えてくれているんですね！**理解があるし、思うことをさせてくれてありがたく思ってます。**でも、トップダウンじゃなきゃ動かないこともあるんだよなあ…**」 ◇思いや願いが共通していることを知り、驚くと同時に安心した様子であった。自分から相談にいくにはためらいがあるようであったため、校長・教頭へのアプローチの材料をより具体的な形にしていくことが必要と考えた。
【ステップ３－（２）計画－②】校長や教頭と相談しながら、校内委員会を開催するための構想が描けるよう、他の学校の情報や校内委員会の資料を提供し、コーディネーターが選択できるようにした。校内委員会のメンバーや年間計画など具体的な案を一緒に考えた。

◇具体的なイメージや相談の見通しがもてたことで、校長や教頭と相談していく気持ちや校内委員会開催に対するモチベーションが高まった。
高「校内の主要な人物が特別支援教育にかかわり、職員全体に発信してほしい。今年度取り組んだことは伝えておきたいし、課題も話し合っておきたい。３月に開けるよう**教頭先生に相談してみます！校長先生や教頭先生からも声をかけてくれると話しやすいなあ**」
◇はっきりと、相談にいくことを宣言していた。やる気が感じられた。

【実践のまとめと考察】

校内委員会が開催されていない理由に目を向けられるようにすることで、校長や教頭の立場に立って思いをめぐらせることができた。客観的な立場から校長や教頭の思いや願いを取材し、伝えたことで、今まで気がつかなかった校長や教頭の本当の思いや願いに気付くことができた。同じ考えをもっていることが分かり、相談をするきっかけが作れた。資料を提供しながら、校内委員会のメンバーや期日、内容などについて一緒に考えたことで、より具体的なイメージがもて、モチベーションを高めることができた。今後、教頭と相談し、校内委員会開催に向けて動き出せそうである。

(5)　実践の経過②

Ｂ高等学校におけるケース会議開催の支援について、概要を以下に示す。（各ケースの詳細は資料５に示す）

①　ケース会議Ｉへの支援

ア　開催までの計画

意見や考えが一番出やすい場所を質問し、効果的なケース会議を開くためのメンバーに気付けるようにしたところ、学年会で話し合い、そこにコーディネーターが司会として参加する形が、教職員の負担も少なく現実的ということになった。結果を教育相談の係会や校内委員会で報告し学年主任から全体に報告してもらう流れが作れた。（ステップ２－①）

高等学校コーディネーターがファシリテーターとしての役割に気付けるよう、関係する教職員の思いや願いに目を向けながら対話を進めていった。ケース会議のキーマンと連絡調整する必要性に気付き、アプローチしていくきっかけが作れた。（ステップ２－④⑤）教職員に対する意識に変化が見られ、ケース会議の趣旨を理解してもらったり、考えを調整したりすることが、活発に意見を出し合えるケース会議につながるということに気付くことができた。（ステップ３－（２）計画－①）開催までの支援の概要を表４に示す。

表4　ケース会議Ｉ　開催までの支援の経過（一部）

※吹き出しは高等学校コーディネーターの発言、◇は特別支援学校コーディネーターの見解を示す。

特別支援学校 コーディネーターの支援	高等学校コーディネーターがとらえた教職員の姿と高等学校コーディネーターの発言			
	学年教職員	学年主任	担任	教育相談係
【ステップ２】 ・学年内の役割や、職員の思いを質問しながら、それぞれの強みや望んでいることに気付き、ケース会議では、共通の目的や目標をもつことの大切さに気付けるようにした。（ステップ２－支援④⑤） ◇ケース会議のキーマンに気付き、連絡調整する気持ちが出てきた。	・対象生徒について、勉強が苦手で少しぼーっとしている程度で、支援の必要性に確信がもてないのではないか。 ・何とかしなければと思っているが「そこからどうしよう」まではなかなか行かない。 **ケース会議の意味や目的を伝えなければ**	・特別支援のことはよく分からないから、コーディネーターに任せてしまう部分が多くなってしまう。でも、何とかしなければと思っていると思う。 **学年主任と担任と教育相談係と調整してみます！**	・一人で支援するのは負担が大きい。まずは先生方から情報を出してもらい、いろいろな先生方の感じ方や見方をお互い知るのが必要。	・前担任で、今までもいろいろな対応をしたり、気にかけたりしてくれている。
【ステップ３】 ・担任や関係する先生方の思いや困っている点に目を向け、生徒の実態把握やケース会議を効果的に行う方法を一緒に考えた。（ステップ３－（２）計画－①） ◇学年主任の強みに気付くことができた。初めての取組で、教職員の理解や協力が得られるか不安そうであったため、解決方法が見付けられるような質問をした。	・ケース会議で沈黙してしまうのが怖い。考えがあっても、他のクラスのことはタッチできないという部分がある。 ・生徒の指導もしっかりしている先生方ばかり。高校の先生は教科で動くことが多いし、みんなで支援方法を話し合ったりする経験がないだけかも… **ケース会議の初めに、みんなで意見を出してほしいことを伝えます。**	・対象生徒が赤点をたくさん取り、必要性を感じたのではないか。面倒見がいいし、いろいろ考えがあるみたいだから、こちらから提案してお願いすれば、行動してくれると思う。 **みんなで意見を出してほしいことを、事前に学年の先生方に呼びかけてもらえるようお願いしておきます。**	・今後どうしたらいいか困っていると思う。保護者対応もあるし、担任の先生だけでは大変な部分もみんなで助け合っていければ良い。 **実態や今までの支援について発言してもらうことを事前に知らせ、打ち合わせしておきます。**	・事前に話してあるので、発言してくれると思う。

イ　開催と実施後

協力要請があり、ケース会議に参加した。高等学校が中心となって行えるよう、サポート役に徹し、なるべく静観をするよう心がけた。高等学校コーディネーターの進行は滞りなく、教職員の意見も活発に交わされた。（ステップ３－実行（２）－①）

実施後、成果をすぐにメールで賞賛してモチベーションを高めるとともに、後日訪問をし、高等学校コーディネーターが収集した教職員の感想や支援の様子、変容について聞き取り、よかった点は賞賛し、次回のケース会議の課題を引き出した。（ステップ３－（２）評価－①）

○　高等学校コーディネーターが行った教職員からの聞き取り
・今までは、考えがあってもなかなか言えず黙ってしまったが、ケース会議を行ったことで学年の風通しがよくなった。
・学年の理科担当職員から「気をつけてみます」と声をかけられた。授業中個別に対応するなど配慮をしてくれ、一生懸命やっているというよい情報も入ってくるようになった。気にかけて、授業中声をかける教職員が出てきた。
○　高等学校コーディネーターの気付きと評価
・場を設定したことがよかった。きちんと支援していかなければと先生方は改めて思えたようである。
・たくさん実態が出て、先生方がよく見ていることが分かった。いろいろ思うところがあるのだから、場を提供し、すりあわせさえできれば具体的な支援にいけると思う。まずは学年主任と担任を巻き込み、保護者へアプローチしたい。

【実践のまとめと考察　ケース会議Ⅰ】

学年会を中心とする機能的で現実的なメンバーを選択することができた。教職員の立場に立って考えていったことで、周囲にアプローチをし、一人一人のもっているよさや役割に気付くことができた。ケース会議の意味や参加の仕方について理解してもらう必要性に気付き、協力者を増やしていくことができた。会議に特別支援学校コーディネーターが同席したが、高等学校側が主体になるよう黒子に徹し、終了後すぐによかった点をフィードバックしたことで、高等学校コーディネーターの成功感や気付きを明確にすることができ、自信につながった。

②ケース会議Ⅱへの支援

ア　開催までの計画

担任の考えと保護者の考えがうまくすり合わず、担任から、特別支援学校コーディネーターが保護者へ話をしてほしいという希望が出た。予想外の状況に、高等学校コーディネーターが混乱していると感じたため、計画の前段階（ステップ２）に戻って支援を行った。質問をしながら問題を整理し、高等学校コーディネーターが担任や校内の関係者と話を深めていく必要性に気付けるようにした（ステップ２－⑥）自ら気付き、関係する教職員と話をしたことで、担任や学年教職員の生徒への思いや支援についての考えを知ることができ、ステップ３では、高等学校コーディネーターが主体となってケース会議の計画を立てることができた。

イ　開催と実施後

ケース会議の実施について質問や要請の連絡がなかったため、静観した。後日訪問し、一人でケース会議が終えられたことを賞賛し、ケース会議の様子や終えてみての職員の様子を聞き取り、次の課題を引き出した。（ステップ３－(2)評価－①）

○　高等学校コーディネーターの評価と気付き
・学年の中で情報交換されており、本人の様子が分かっているため支援方法のアイデアが次々出た。
・就職について、このまま入社させてしまうのは心配という共通した意見が出た。進路指導部の就職担当の先生が参加してくれ、内定先に実態を伝えたり、就職している卒業生に話をしてくれることになった。
・「特別支援教育って何？」といった教職員の抵抗感はなくなったようである。
・今後、どこまで支援できるかが課題。支援の進み具合を見て次回を実施していく。
・どの学年も情報交換がされると、ケース会議も形式張らずにできると思う。「最初は形と時間を作り、腰をあげるのがコーディネーターの役目」なのかなと思った。

【実践のまとめと考察②　ケース会議Ⅱ】

計画→実行→評価のサイクルを繰り返したことで、支援の量が大幅に減り、高等学校コーディネーターの自立を促すことができた。このサイクルが定着していくことで、高等学校が自治的に取り組めるようになっていくと考える。高等学校コーディネーターから「場を提供し、（教職員の意識の）すりあわせさえできれば具体的な支援にいけると思う」「形と時間を作り、腰をあげることが役目なのかなと思った」という言葉を引き出すことができた。これらは、高等学校コーディネータ

ーが、教職員の生徒に対する気付きや思いの強さ、支援力を引き出せたことを実感できたとともに、校内のファシリテーターとしての役割意識を高めることができたととらえる。

Ⅵ　研究のまとめ

１　成果

本研究の成果をまとめると以下のようなことである。

(1)「支援ステップ表」を作成し、表を活用したことについて

○「支援ステップ」表という指標があることで、支援の進捗状況を確認し、支援内容や支援方法を見直すことができた。高等学校の状況や高等学校コーディネーターの経験値に違いがあっても、一貫性のある見通しをもった支援ができた。毎回の相談で変化する状況や高等学校コーディネーターの気持ちの揺らぎにも、臨機応変に対応することができた。

○ステップ０から順番に支援を進めていくことを想定していたが、学校の状況や相談内容によって、開始のステップを変えたり、ステップ１と２を同時進行させる場合があることが分かった。

(2)「支援ステップ表」の内容について

○高等学校コーディネーターの思いや願いを大切にし、自ら気付き、考え、実践するという視点に立って、支援内容を取り入れたことは、コーディネーターの自信につながり、自主性を促すことができた。

○マネジメントの視点を取り入れ、高等学校が組織として取り組めるような支援をしたことは、高等学校コーディネーターが校長や教頭と相談するきっかけを作ることができ、校内で特別支援教育に携わる人を増やすことができた。高等学校の教職員が支援の必要な生徒の特性に気付き、活発に意見交換をしたり、配慮したりする姿が見られた。特別支援学校の直接的な指導は少なくなり、高等学校が自治的に取り組めるようになる基盤ができた。

２　課題

本研究における課題は以下のようである。

○実際にケースを重ねていく中で、定期的に「支援ステップ表」を見直し、より適切な支援ができる指標となるよう加筆・修正していきたい。さらに、「支援ステップ表」の使い方のパターンや、行った支援とその成果と課題をまとめ、特別支援学校コーディネーターがより具体的にイメージし、行うべき支援を予想できるような補足資料を作成していきたい。

○高等学校には課程や学科による違いがあり、小・中学校に比べ、校風や支援の方向性に特徴が出てくると思われる。引き続き文献や研究にかかわる資料、特別支援学校コーディネーターなどから情報を収集するとともに、実際にケースを重ねていく中で、課程や学科、校風などで支援内容を分類整理し、より使いやすい「支援ステップ表」にしていきたい。

〈参考文献〉

・相澤　雅文・清水　貞夫・二通　諭・三浦　光哉　編著
『特別支援教育コーディネーター必携ハンドブック』　　クリエイツかもがわ(2011)
・「障害のある子どもへの一貫した支援システムに関する研究－後期中等教育における発達障害への支援を中心として－」　　国立特別支援教育総合研究所（2010）
・岩崎　夏海　著　『もし高校野球の女子マネージャーがドラッガーのマネジメントを読んだら』
ダイヤモンド社(2009)
・伊藤　守　著　『図解コーチングマネジメント』　　ディスカヴァー・トゥエンティワン(2005)
・Ｐ.Ｆ.ドラッガー　著・上田　惇生　訳　『マネジメント〔エッセンシャル版〕－基本と原則』
ダイヤモンド社(2001)

（担当指導主事　木村　隆美）